

Accounting, Arithmetic & Art Journal



NO.13

The **IP**ACIOLI **S**OOCIETY **U**JAPAN

1999.04

第11回フォーラム開催のお知らせ

今回のフォーラムは中世・ルネサンスの科学史を研究される三浦伸夫先生（神戸大学国際文化学部教授）をお招きし、「パチョーリの数学」をお話しいただくことになりました。『スママ』と『パチョーリ版ユークリッド原論』の評価がテーマですから、当フォーラムでは数学者ルカ・パチョーリの数学史上の業績を聞く初めての機会となります。奮ってご参加ください。

時：平成11年5月22日(土) 午後2時から6時30分(講演2時間、懇親会2時間)

場所：拓殖大学文京キャンパスD館第一会議室(地下鉄丸ノ内線茗荷谷駅下車5分)

東京都文京区小日向3-4-14 □(代表)03-3947-2261

[同封郵便振替用紙にて出欠をお願いいたします。]

<三浦伸夫先生のプロフィール>

[略歴]

昭和30年生まれ。学部時代に数学を勉強し、大学院にて科学史を専攻。中世・ルネサンスの科学史を専門とし、神戸大学国際文化学部では科学・思想形成論をご担当なさっています。

[最近の業績]

「アラビアの計算法」『数学の歴史 2』(共立出版)

「中世アラビア・ラテン世界の商業算術 14~16世紀イタリアの算数学派の成立」

『比較科学史の地平』(培風館)

The Algebra in the Liber Abaci of Leonardo Pisano (Historia Scientiarum)

訳書：マードック著『世界科学史百科図鑑 1』(原書房)

〃：ローウラー著『神聖幾何学』(平凡社)

〃：ライプニッツ『ライプニッツ著作集 数学』(工作舎)

『スママ』がやって来る

雄松堂書店のご厚意でフォーラム当日『スママ 第二版』(1523年)を会場に展示致します。手に触れられる貴重な機会ですので、是非ご検分ください。[Summa de Arithmetica, Geometria Proportioni et Proportalita. Toscolano: Paganino de Paganini, 1523.]



はじめに

商人たちの活動が大規模かつ複雑なものになるにしたがい、取引についての記録方法も発展した。13世紀には帳簿が出現し、13世紀末から14世紀初めにかけて複式簿記が成立したといわれている。パチョーリの主著『算術、幾何学、比と比例大全』（ヴェネツィア、1494年）の第一章「複式簿記」の項は、それをはじめて理論的に体系化したものとして有名である。この領域の専門家の皆様をまえにして、素人以前の状態にあるわたしは、この作品を生み出す背景となった14・15世紀、すなわち中世後期のイタリア商業のありかたについて、現在思案しているところをご報告してみたい。この報告について、専門家の立場からご意見・ご批判をいただければ幸いである。

1 定着商業

1) 商業の発展

イタリア商人のおこなう商業は、13世紀において大きく発展した。まず、商業圏が拡大した。東方では、第4回十字軍とヴェネツィアとによってラテン帝国が成立(1204)すると、黒海がイタリア商人に対して解放され、その後ジェノヴァ協力によって再興した(1261)ビザンツ帝国には、もはや黒海を閉鎖する力はなかった。さらに、黒海をも包摂した「モンゴルの平和」と、シリアにおける十字軍国家の崩壊(1291)とは、東西商業の幹線をシリア・エジプトから黒海へと移動させた。教皇が十字軍国家を攻撃するマムルーク朝との取引をキリスト教徒に禁止する一方で、アイン・ジャールートの戦い(1260)で同朝に敗北したモンゴルとの連携をはかったことは、この商業幹線の移動を促進した。その結果、黒海にはターナ(アゾフ)やカフファ(フェオドシア)のような、イタリア商人の商業拠点が出現した。その後シリア・エジプトとの商業が再度活発になっても、オスマン・トルコが黒海を西欧人に対して閉鎖するようになるまで、黒海はイタリア商人にとっては重要な市場でありつづけた。さて、西方では、キリスト教徒が、ムスリム(ムワッヒド朝)の軍隊にラス・ナバス・デ・トロサの戦い(1212)で決定的な勝利をおさめたのを契機に、レコンキスタを急速に進展させ、同世紀末にはジブラルタル海峡を支配するにいたった。その結果、イタリア商人は、イベリアとの商業を拡大し、さらに直接・間接にマグリブとの商業にも進出したのみならず、地中海から北海まで直接に航海することができるようになった。北西欧方面では、中世教皇権の最盛期を体現したインノケンティウス三世が、第四回ラテラン公会議(1215)において聖地十字軍の遠征資金として多額の教会税・献金を徴収することを決定したが、やがてその徴税人として地歩をかためたイタリア内陸都市の商人は、金融業にも進出し、とりわけ人口と経済の発展が急速な北西欧において活動を拡大した。その後、教皇は、授封権のあるシチリア王国を、敵対するホーエンシュタウフェン家(神聖ローマ皇帝を輩出)から剥奪し、従順なフランス国王の弟シャルル・ダンジューに授与した(1265)。イタリア商人、とりわけフィレンツェ商人は、シャルルが授与された王国を現実獲得するためにおこなった軍事遠征の資金調達に奔走し、この遠征が成功すると、それを契機にシチリア王国のみならず、フランスや教皇側に立ったイギリスでも金融業者としての地位を確立した。

商業圏の拡大に並行して、商業交通も発展した。地中海では、従来からある船舶にくわえて、軍船として発達したガレー船に商船としての機能を付加したガレー商船や、北海から導入された大型帆船であるコグ(コッカ)船が出現した。ガレー商船は、多数の漕ぎ手がいるので多額の航海経費を必要としたが、操縦性にすぐれ、防衛力も大きかったので、高価軽量の商品を輸送するのに適合した。コグ船は、四角帆によって大きな推進力をもつ一方で、頑丈な船体に取り付けた大舵によって操縦性を確保したものであり、低価重量商品の大量輸送に適合した。従来の船舶と、積載量、航続距離、防衛力、操縦性が増したこのような新種の商船との併用によって、積載商品の質や量、および航路の遠近に適合した船舶を選択することが可能になった。また、イタリアの船舶がイギリスや

フランドルに恒常的に航海するようになったが、新種の船舶によって大西洋や北海での航海が容易になったと思われる。羅針盤の実用化やポルトラーノ(海路図・誌)の出現によって、曇天での航海や、海岸のみえない沖合でのより直線的な航海が可能となり、従来のきびしい航海上の制限が緩和された。内陸では、商業の発展によって勢力を拡大した都市や、あるいは封建的無秩序を克服した国王および大諸侯によって、道路(峠道を含む)、橋梁、河川などの改修がおこなわれ、家畜や荷車、河川船舶などが輸送手段としていっそう活用されるようになった。また、都市は、各地の権力者たちとの間に商業協定を締結し、交通の安全を確立した。海上、陸上を問わず、商業交通のための条件が整備されたのである。

2) 商業形態

商業の発展を背景に、とりわけ13世紀後半において、イタリア商人のおこなう商業のありかたが、遍歴商業から定着商業へと徐々に移行した。遍歴商業では、商人は商人仲間と隊商を組みながら商品とともに目的市場まで旅行(遍歴)し、そこでその販売代金によって購入した商品を今度は母市までもちかえる。定着商業では、商人は旅行することなく母市にとどまり(定着)、各地にもうけた代理人(ないし支店)に通信によって指示をおこない、現地市場において取引をしてもらう。遍歴商人は、同時に海陸の輸送業者でもあり、武器を携行して自分と商品を防衛する。定着商人は、商品の輸送をこの間に商人から分離して出現した専門の輸送業者にまかせて、自分は店舗においてペンを片手に通信文書を作成し、取引の結果を帳簿に記入する。武器をペンに持ち替えた商人は、多少とも冒険的であった以前の性格を希薄にしたが、さらに14世紀にイタリアで誕生した海上保険は、海上商業につきまとう危険をある程度緩和することになる。商業から冒険や危険の要素が希薄になっていった。さて、通信には時間がかかったので、刻々変化する市況に迅速に対応するためには、代理人に取引についての広範な権限を委託せざるをえず、このことから代理人には、現地に滞在する親類縁者、知人、同胞市民という、気心のしれた信頼のおける者を指名することが普通であった。定着商業が成立したとはいえ、遍歴商業は消滅してしまっただけではなく、定着商業に必要な条件が満たされない状況においては、以後も根強く存在しつづけていく。

定着商業では、各地の代理人に対する取引の指示はもちろん、取引をおこなうのに必要な各地からの情報収集も、通信によっておこなわれた。このことによって商人は、同時にいくつかの市場を相手にして、多角的に取引することが可能となった。通信は、定着商業にとって神経や触覚の役割を果たしたのである。13世紀の通信は、商業都市や商人の同職者組合など各種の団体がもつ、それぞれに固有の通信組織によっておこなわれていたらしい。14世紀前半になると、フィレンツェの大商社は、各社がおかかえの飛脚をもっていたが、これとならんで独立自営の職業的飛脚も出現し、中小商社にその業務を提供していた。同世紀後半には、多数の飛脚と多少とも広範な通信網をもつ、企業家としての飛脚親方が出現した。以後、このような私的な通信企業が商業通信業務の主役となったが、主要市場間では飛脚を定期的に往復させる定期便が発展し、15世紀になると馬が組織的に利用されるようになった。とはいえ、旅行者や商品輸送業者など、適宜利用できる者に通信文書を委託することも引き続いておこなわれた。海上では、商品を積んで出港する船舶の船長に、寄港地宛(および寄港地経由)の通信文書が委託された。多少とも遠方にでかける船舶には、商品とともに通信文書が積み込まれていたと思われる。緊急事態に対処して一人の飛脚、一隻の船舶を借り切って文書を配達させる特別便、とりわけ船便は、その配達料金がきわめて高価であり、利用が限られていたが、商人が通常利用する普通便は、配達料金が低価であり、きわめて頻繁に利用されていた。市場は、商品のみならず、情報の集散地でもあった。配達に要する時間は、その経路の自然的・社会的条件によって多様であった。陸上、とりわけ近隣地間の定期便は一定していた。海上、とりわけ遠隔地間の場合は偏差が大きかったが、その場合でも経験によってある程度は予想することができた。

3) 企業形態

遍歴商業における企業のありかたは、一般にコンメンダ契約とよばれるものをその基盤にしていた。コンメンダーレ(委託する)という言葉から派生したコンメンダ契約では、委託者(コンメンダンテ)が資本(貨幣、商品、船舶持分)を被委託者(コンメンダターリオ)に委託し、後者はこの資本を活用して利潤を獲得するのであるが、通常は一回の商業旅行が完結した時点で、両者は契約にしたがって利潤を分配し、企業は解散した。定着商業の出現とほぼ並行して、いわゆる会社組織(コンパニーア)が誕生したが、これはクム・パーニス(一緒にパンを食べる仲間/ラテン語)という言葉から派生したものであるという。ここでは、いくにかの会社仲間が、資本を持ち寄って会社を設立し、役割を分担してその経営にあたり、社員を雇用して労働させ、獲得した利潤は会社契約にしたがって仲間のあいだで分配した。同時に、経営規模を拡大するために、会社仲間以外の、経営には参加しない人々から、個別の契約によって資金を借り入れたが、この借入資金については利子を支払い、元金を返還した。借入資金によって、会社の規模はいくらでも拡大することができたが、会社が倒産すると、会社仲間のみならず、この資金を提供した多数の市民がその打撃をこうむることになる。1340年代のフィレンツェでは、支店を通じてイギリス国王に巨額の融資をしていた大商社が、百年戦争の開始(1339)によって国王が支払不能になった結果破産し、多数の市民が被害をこうむった。ちなみに、これ以降、商人が内外にわたる取引をするさいには、本店および各支店の連鎖倒産を防ぐため、相互に連帯責任のある本店・支店関係において支店を設立するのをやめた。出資者は重複していても、法的には独立した別個の会社(特株会社)を設立し、相互に代理店契約をむすぶようになったのである。会社の継続期間は、会社契約によって(たとえば3年というように)規定されてはいるが、期間終了後も仲間の了解があれば自動的に延長されるので、実質的にはかなり長い期間にわたることが多かった。定着商業の成立によって、企業の多角的経営が可能になったが、会社の出現によって、企業の経営規模および存続期間が拡大したのである。

定着商業や会社組織の誕生は、それに対応する種類の商業記録の出現をもたらした。中世初期の商業史料としては、修道院所領明細帳や国王特許状など、領主や国王が作成した文書があげられる。中期には自治都市の成立・発展にしたがい、都市規約やさらには同職者組合規約などが出現した。また公証人文書は、10紀頃の北イタリアで誕生したが、商業が発展するにつれて、各地で取引契約の記録としても多用されるようになった。公証人とは、法的権利について公的に証明する権限(公証力)を公権力(皇帝・教皇、国王、自治都市)からあたえられた人物であり、公証人文書とは、私人の行為(遺言、贈与、取引、など)によって生じた権利関係を、公証人がこの権限にもとづいて記録した文書である。

さて、定着商業や会社組織が誕生した13世紀後半以降は、私人である商人たちによって各種の経営史料、すなわち商業実務、帳簿、商業通信文書(書簡、為替手形、商品価格報告書、など)、私的契約書(取引契約を公証人を媒介することなく当事者間で作成した文書に記録したもの-会社契約書、売買・貸借契約書、雇用契約書、など)が作成された。ちなみに、商業取引を公証人文書に記録することは、13世紀後半以降、フィレンツェ商人などトスカーナ商人の間ではあまりみられなくなったが、ジェノヴァ商人の間では引き続きさかんにおこなわれていた。その理由についてメリスは次のようにいう。内陸都市の企業は、その経営規模が海港都市のそれに比較して一般的におおきく、その商業網は濃密であり、取引相手について詳細な情報をえることができるので、その人柄や支払い能力などについて正確な評価をくだすことができた。したがって、作成に煩雑な手続を必要とする公証人文書によって、取引契約を保証する必要がなかったのである、と。また経営史料とほぼ並行して、商業法廷の裁判記録も出現したが、商業法廷とは、商業都市が商業のみならず、経済一般に関する係争を迅速に処理するために設置した法廷である。このように多様になった商業史料のなかでも、経営史料は、商業の実態についてのきわめて詳細な情報を記録している。イタリアの中世商業史料としては、サポーリやメリスなどが経営史料を積極的に開拓して以来、従来の規約や公証人文書にかわって、それがきわめて重要な地位をしめるにいたった。

2 市場構造

1) ペゴロッティ編『商業実務』フィレンツェ、1340年頃(F.B.Pegolotti,ed.by A.Evans, La Pratica della Mercatura, Camb.Mass. 1936, rep. New York 1970.)

フィレンツェのバルディ商社は、イギリスからコンスタンティノープルにいたる各地に支店をもつ、ヨーロッパでおそらく最大の商社であったが、ペゴロッティはその社員としてフランドル、イギリス、ファマグスタに滞在した。帰国後、情報の集積する母市で編纂したこの書物は、定着商業とともに出現した類書のなかで最大のものであるが、「序文」、「市場案内」、「商業知識」、の三部からなり、後二者、とりわけ「市場案内」の部が中心をなしている。ここでは市場ごとに、取引される商品、使用される貨幣・度量衡、それと他市場で使用される貨幣・度量衡との換算値(この記述があれば両市場間には原則として取引関係がある、というのが一般的見解)、関税・取引税、特定商品(小麦など)の輸出に必要な手続、造幣方法(貴金属を造幣所にもちこんで造幣してもらう場合)、特定相手市場との間の為替相場表・為替支払期日、その市場に固有の事情、などの項目が記述されている。すべての項目について記述がある市場も、一部にしかない市場もあり、多種多様な商品について記述がある市場も、特定商品にしかない市場もある。案内があるのは、北西欧、地中海・黒海地域(モロッコの大西洋岸を含む)、内陸アジアに分布する53の市場であり、うち41が地中海・黒海地域にある。市場には大・中・小の市場があり、また総合市場もあれば特化市場もある。ここに案内はないが、本書をとおしてたんに名前があげられているだけの市場をくわえると、ほぼ450くらいの市場が記録されている。

「商業知識」の部では、特産物(スペツィエーリエ)の一覧表において、胡椒、生姜、象牙、珊瑚、砂糖、米、オリーブ油、オレンジ、干葡萄、蠟、膠、石鹼、紙、綿、銅、錫、鉛、硝酸カリウム、明礬、タール、などじつに180種類以上の多種多様な商品があげられており、またこの一覧表とは(多数の商品が重複するが)別個に、毛織物、絹・毛糸、毛皮、真珠、宝石、小麦、各種の塩魚、など多数の商品について、その特性、品質、保存方法、取引方法、など取引に必要な知識が記述されている。また、ここにあげた商品にくわえて、「市場案内」の部においても、さらに葡萄酒、羊毛、皮革、など各種の商品についての記述が随所にみられる。商品には、高価軽量のものもあれば、低価重量のものもあり、製品も、原料も、食料もある。日常に大量消費されるものも、消費の限定された特殊なものもある。その産地もじつに多様であるが、地中海・黒海地域とそれ以外の地域とに区別してみることができるだろう。それ以外の地域としては、北欧(琥珀)、イギリス(高級羊毛)、フランドル(高級毛織物)、内陸アジア(生糸)、インド(胡椒、宝石)、アフリカ(象牙)、ペルシア湾地域(真珠)、などがあげられる。本書にみられるのは、まことに多種多様の市場、遠近の各地で生産された多種多様の商品である。

2) レヴァント商業、地中海商業、北西欧商業

レヴァント商業とは、レヴァント(東方)にある非西欧地域を相手に、西方(イタリア以西)にある西欧地域がおこなう商業のことであり、レヴァントとは、一般にはシリア・エジプト、およびロマニア・黒海地域をもふくむ地域とってよいだろう。その取引商品としてよくあげられるのは、胡椒、絹織物であり、またその対価となる毛織物である。ところで、ペゴロッティにみられるように、中世後期のイタリア商人が活躍した市場はレヴァントだけではなく、取引した商品もこのような高価軽量のものだけではない。彼らは西地中海にも、北西欧にも進出した。地中海・黒海地域では各地において、胡椒、絹織物、などを売買しただけではなく、小麦、葡萄酒、オリーブ油、皮革、羊毛(各種)、綿、明礬、など低価重量の商品を大量に売買した。また北西欧では、その特産物の羊毛・毛織物を購入し、胡椒・絹織物のような「東方商品」のみならず、葡萄酒・オリーブ油・明礬のような「地中海商品」を販売し、さらに国王・領主への金融をもおこなった。イタリア商人にとって、レヴァント商業は、地中海・黒海商業のうちの一部であり、また北西欧商業は、地中海商業の延長線上にあったといえるだろう。

周知のように、簿記史の研究から出発したメリスは、その該博な知識を駆使して多数の経営史料を分析し、中世の経営史・経済史に多大な貢献をした。彼が力説するところによれば、海上輸送費は一般に、14世紀の過程で絶対的に低下したが、なかでも低価重量商品の輸送費が、高価軽量商品のそれにくらべて相対的に大幅に低下した。輸送費は、商品の重量に比例するものから、相対的にその価格に比例するものへと移行し、換言すれば、輸送費の体系が、「従量的な体系」から、相対的に「従価的な体系」に移行し、その結果、低価従量商品の海上輸送が大いに進展したのである。たしかに、すでに14世紀前半には、内陸都市のフィレンツェでも、シチリア産の小麦が恒常的に大量に消費され、地中海地域の安価な羊毛を原料とする毛織物が大量に生産されていた。もちろん、ヴェネツィアなどの海港都市では、小麦、葡萄酒、オリーブ油、あるいは皮革、羊毛、(原)綿、などの日常物資が海外から大量に輸入されていた。このような日常的な食料・原料は、地中海・黒海地域で生産され、船舶によって輸送されたのである。これとは対照的に、はるかに遠隔の地域から（少なくとも行程の一部は）陸上の隊商によってレヴァントや黒海にもたらされ、さらにイタリア商人が西欧に輸入する、胡椒、生糸、などのいわゆる「東方商品」は、高価軽量でその輸送費が相対的に軽微だったので、輸送の手段・体系がまだ未発達であった時代にも輸入されていた。また、「東方商品」や「地中海商品」の対価として、北西欧から地中海地域にもたらされるものは、琥珀・毛皮、北西欧に豊富な金属およびその製品、イギリス羊毛・フランドル毛織物、皮革、などであった。その一部には、帰路の船腹を満たすために積載された皮革のような、地中海にもある低価重量商品がみられるものの、そこにはまだ日常的な食料はみられない。地中海・黒海地域では、食料はもちろん、原料もその多くは、その内部で自給していたのである。

3) 地中海の「南北関係」

中世後期に、イタリア北・中部の都市では商工業が発展した。都市への食料や原料の供給は、やがてその後背地からだけでは困難となり、低価重量商品の輸送が発展するのにもない、それを地中海・黒海地域の農業・牧畜地帯から輸入し、そこに工業製品や、商業網をとおして調達したその他の必要物資を輸出するという構造が成立した。地中海・黒海各地の物資の相互依存関係が、より日常的な物資の水準にまで深化したのである。イタリアでは、北・中部の都市がナポリ王国やシチリアなどに各種製品を輸出し、そこから食料・原料を輸入した。いわゆる「小麦と毛織物の交換」であり、その結果、後者は「穀物産地という不幸」のせいで前者の経済的植民地になった。また、ヴェネツィアは、第四回十字軍を契機にクレタを植民地としたが、そこに封地をあたえられたヴェネツィア人移住者は、小麦などをヴェネツィア政府に提供する義務をもった。さらに、葡萄酒、砂糖、綿、生糸、などの生産が発展し、クレタは、ヴェネツィア商業にとってたんなる寄港地ではなく、重要な商品の供給地ともなった。ここでは、黒海から輸入した奴隷を使役して、プランテーション経営もおこなわれた。地中海・黒海においてヴェネツィアやジェノヴァがもっていた植民地は、多少ともクレタと同様の役割をはたしていた。いわゆるレヴァント商業が、特産物のたんなる交換をおこなう「東西」商業であるとするれば、ナポリ王国、シチリア、クレタ、などにおいてみられるのは、経済的な支配関係をともなう「南北」商業であるといえるだろう。

先進地域が後進地域を経済的に支配するという「南北関係」は、地中海・黒海地域では、地理的にいえば南北間においてだけでなく、東西間においても発展したようである。地中海商業史家のアシュトールは次のようにいう。11・12世紀には、エジプトやテュニジアなどの活発な毛織物工業は、製品の一部を南欧にも輸出していた。西欧のシリア・エジプトへの毛織物の輸出は十字軍時代にはじまるが、14世紀末にはその安価な毛織物が大量に輸出されたので、現地の毛織物工業はもとより、綿織物工業や麻織物工業までもが衰退した。ここでは、マムルーク権力による重税や財産没収のために私企業が衰退し、またマムルークたちが経営する特権企業は技術水準の低下をまねいたので、西欧の活発な私企業の製品には対抗できなくなったのである。また、良質綿の産地シリアは、以前はその活発な綿織物工業が製品をエジプトや南欧にも輸出していたが、14世紀中葉以降は、イタリ

ア北部など西欧の綿工業のための原綿供給地に変化してしまった。シリアでは人口減少からの回復が停滞し、穀物から綿への作付転換が進行したが、西欧ではこれとは対照的に人口の回復が順調であり、牧地から穀畑への回帰がおこった。シリアの綿織物工業は増大した綿を消費しきれなくなったが、イタリアなどでは羊毛不足からその代替品としての綿への需要が拡大したので、西欧におけるシリア綿の輸入が拡大した。シリア・エジプトと西欧との地位は、繊維工業では逆転したということになるが、アシュトールによれば、このような逆転現象は繊維工業だけにはとどまらない。シリアやエジプトにおける毛織物市場や綿生産などの実態については、さらに詳細な検討が必要だと思われるが、このような構図は大筋において是認しうるものと思われる。ここにみられるのは、「レヴァント商業」のもうひとつの顔である。

おわりに

帳簿をはじめとする経営史料によって、中世後期のイタリア商業の実態の解明がおおいに進展した。しかし、少なくともわが国においては、それと厳密に結合した金融の実態、とりわけ金融市場の構造についての研究は、まだほとんどおこなわれていない。これを解明してこそ、イタリア商人の経済活動の全体構造が理解できるものと思われる。

また、このような経営史料を作成することのできた会社は、多少とも大規模のものであり、経営史料が残存する地域も、トスカーナやヴェネツィアなど特定の地域にかたよっている。さらに、経営史料は、個々の企業の経営記録であることから、国家や社会全体の経済動向を知るための史料としては、どうしても一定の限界がある。たとえば、フィレンツェ毛織物工業史家の星野秀利がいうように、毛織物の織元や取引会社の経営記録は多数残存するが、フィレンツェ全体の毛織物の生産量を記録した史料は残存しないので、それについては推測する以外に方法がなく、いまだに年代記にあげられた生産量をめぐって甲論乙駁の状態がつづいている。経営史料の射程の向こう側にある部分は、けっして小さなものではない。

[付記：本稿は平成10年10月31日開催の第10回フォーラムにて報告された内容です。当日は徳橋曜先生（富山大学）にコメンテーターを、片岡泰彦先生（大東文化大学）に司会をお願いして、参加者との間で活発な質疑が交わされました。引き続き別会場で開かれた懇親会でも論議が尽きず、和気藹々のなか散会した。]

シチリアの「会計史国際会議」参加記

大東文化大学 片岡泰彦

I イタリア随一の景勝地・タオルミーナ

「世界諸国の会計史の発展と展望」をテーマとする『会計史国際会議』（International Workshop, Evolution and Perspective of Accounting, History in Different Countries）が、イタリアのシチリア島のタオルミーナ（Taormina）で、1998年9月28日と2月29日の2日間、開催された。この会議は、メッシナ大学創立450年を記念して、イタリア会計史学会（Società Italiana di Storia della Ragioneria）とメッシナ大学経営経済学部（Istituto di Economia Aziendale Università di Messina）の共催によって開かれたものである。筆者は、報告者として招待された15名の1人として、この会議に出席する機会を得た。

シチリアの歴史は古く、紀元前4世紀のギリシャ時代に始まる。その後、ローマ、ヴァンダル族、東ゴート族、東ローマ帝国、アラブ、ノルマン、ドイツ、フランス、スペイン、北イタリアのサヴォイア家、オーストリアのハプスブルク家、ナポリのブルボン家等の支配を経て、1860年に、イタリア王国に併合された。第二次世界大戦後、イタリア共和国となった。そして、シチリアは、特別自治の権利を認められるに至ったのである。

地中海最大の島シチリアは、地理的に有位であるうえ、土壌と気候に恵まれたので、四方から、他民族が侵入し、支配し、独特の文化を作り上げてきたのである。このシチリアには、パレルモ、シラクサ、アグリジェント他等、古い歴史を持つ多くの町がある。なかでも、タオルミーナは、シチリア島随一の景勝地で、イタリアでも最も美しい町の一つと言われている。イオニア海に面した、標高400メートルのカステッロ山の中腹のテラスに飾られた宝石のような町である。

II 会議場は旧修道院「サン・ドメニコ・パラス・ホテル」

シチリアへ行くための成田からの直行便はない。ヨーロッパの大都市を経由して、パレルモかカタニーヤまたはトラパーニの空港から、島へ入ることになる。

私は、ミラノを経由して、カタニーヤ空港からタオルミーナへ行くことにした。ミラノのリナーテ空港からカタニーヤ空港までは、約2時間であった。シチリアの空港に、一步踏み出した途端、私は、南国特有のしめった暖かい空気に包まれた。9月末とはいえ、2時間前のミラノは、すでに秋というよりは、初冬の小雨にたたられていたのである。夏に強く冬に弱い、8月生まれの私の全身に、精気が蘇ってくる。「シチリアだ。国際会議だ。やるぞ!」と思った瞬間、思いがけないことに「ミスター・カタオカですか」と英語で話しかけられた。背の高い、整った顔に、眼鏡の似合う男だ。会議開催者側の教員だった。カタニーヤからタオルミーナまで、鉄道かバスか、またはタクシーかで悩んでいた私の問題は、一気に解決した。迎えがいるとは思っても観なかった。うれしかった。開催者がチャーターしたタオルミーナ行きの小型バスには、4人の同行者がいた。さきほどの男性と、カルロ・アンティノリー教授、そしてフランク・クラーク教授夫妻である。

アンティノリー教授は、パチョーリ簿記論のイタリア語への翻訳者で、前から会いたと願っていた教授である。また、ニューカースル大学のクラーク教授は、シドニー、京都そしてヴェニスで出会ったことのある顔見知りの教授である。

タオルミーナ行きのバスは、初めは海沿いの平地を走る。沿道は、土と岩だけの殺風景な景色が続く。そのうち、左前方に3263メートルの噴火をあげるエトナ山の姿が、ゆったりと聳えてくる。

30分も走ったころ、タオルミーナの標識が目飛びこんできた。車は、急に坂道を登り出す。そして、前方に海がひろがってくる。

グラン・ブルーの世界だ。その後、車は、狭い坂道を登ったり、降りたり、とにかく曲がりくねった勾配の多い道を進む。やがて、車は古めかしい建物の前で止まった。まさに中世の修道院だ。5つ星とは縁遠い感じである。門から玄関までの石畳は、でこぼこで、小さな車のついたバッグを、ころがすのが大変だった。ただし途中で、ポーターが来て運んでくれたので助かった。

この建物こそ、会議開催場所のサン・ドメニコ・パラス・ホテル (San Domenico Palace Hotel) である。15世紀に建てられた修道院を改造し、ホテルとしたものである。外観とは異なり、ホテル内は、その様相を一変させた。高い天井、白い大理石の床、広く長く続く廊下、その廊下の端に置かれた中世の修道僧が使用した長椅子、壁にかけられた中世の絵画、どこからか黒衣の修道僧が現れてきそうな静寂の空気、これこそまさにパチョーリの世界である。

そのうえ、ホテルはタオルミーナの超一等地にあり、イタリアでも屈指の5つ星のホテルである。4日間、宿泊することになった部屋も、清潔感の漂う、しかし歴史を感じさせる雰囲気を保っている。ベッドは鉄製で、置いてある家具もアンティークだ。

窓を開けると、映画『グラン・ブルー』にも出てくるイオニア海が、一望に開け、かなた右手には、頂上に煙をたなびかせるエトナ山の姿が、広がっている。そして、左手後方には、紀元前3世紀に造られ、世界で3番目の規模を誇るギリシャ劇場の姿が見られる。

さらに、窓の下のホテルの美しい庭園には、南国特有のハイビスカスの花が咲き乱れている。まさに絶景である。

III 旧教会内でパチョーリに関する報告

9月27日、夜9時から、オープニング・パーティが、ホテル内の応接間で開かれた。ジュースとカクテルだけの簡単なパーティだった。ここでは、多くの教授達と、久しぶりに会うことができた。

ロンドン大学のリチャード・マクベール教授、パルマ大学のジュセッペ・ギャラッソ教授、ニューカースル大学のフランク・クラーク教授、ギーセン大学のカール・ウェバー教授、ディーキン大学のガリー・カーネギー教授、パリ・ダウフィン大学のペーター・スタンディッシュ教授、マルタ大学のダニエル・ダルマニン教授、パチョーリ簿記論のスペイン語の翻訳者・エステバン・ヘルナンデス・エステベ氏等の報告者達である。彼等とは、過去の大会で会ったことがあり、すでに顔馴染みであった。

さらに、司会役のベルガモ大学のアントニオ・アマデウツィ教授、そして学会開催の責任者であるメッシナ大学のフランチェスコ・ヴェルミリオ教授等とは、初対面ながら、学会を通じて親しくなることができた。

誠に残念なことは、日本の会計学者の多く、ポーランドのヤルーガ教授は、病気のために欠席で、グダンスク大学のLech Bednarski教授の代読が決定していた。

9月28日(月)朝9時から、オープニング・セレモニーが同ホテル内の大ホールというよりは、旧修道院内の教会で始まった。奥まった上段の長テーブルの前に座った、ベルミリオ教授の開会の言葉の後、招待された15人の報告者が、120~130人の出席者の前で、報告順に紹介を受けた。ホール内で、東洋人は、私一人だった。奥の天井に近い壁、そして左右の壁をくりぬいた場所には、キリストやサン・ドメニコの絵が飾られ、まさに荘厳な雰囲気が立ち込めている。この開会式の模様は、地元の新聞とテレビに報道された。

報告は、アマデウツィ教授の司会で始まった。報告の公用語は英語である。従って、多くのイタリア人の出席者のために、英語とイタリア語による同時通訳がさいようされた。1人の報告時間は30分、質疑応答の時間が10分だった。

その日の11時50分から始まる私のテーマは、「日本におけるパチョーリ簿記論についての文献研究」(The Study of Literature about the Theory of Bookkeeping of Luca Pacioli in Japan)である。私の英文による報告は、35分ほどで終了した。報告の後、ギャラッソ教授から、「あなたは、なぜパチョーリに興味を持ったか」という意味の質問を受けた。そこで、パチョーリは、「近代会計学の父」であること、私の知っている有名人、たとえば、レオナルド・ダ・ビンチ、ピエロ・デラ・フランチェスカ等を友人としていること、そして私の父からの影響等について説明しておいた。

IV 歌は世界の共通語

28日夜9時から、場所をホテル・ヴィラ・ディオドロ (Hotel Villa Diodoro) の大ホールに移して、ガラ・ディナー (Gala Dinner) が開かれた。おいしいシチリア料理の後、地元のプロの歌手と踊り子達が、すばらしいシチリア地方のダンスと歌を披露してくれた。最後に、歌手が客席にも、歌のかけあいを注文してきた。そのうち、最前列にいた私が歌手の中央にひっぱり出され、歌手達と一緒に歌うことになった。そのうえ私がソロで出席者のリクエストで「オオ・ソレ・ミオ」と「サンタ・ルチア」をグループの伴奏で歌うことになってしまった。後で、多くの人々から「grazie」の握手を求められた。その夜、ホテルの自分の部屋で一人落ち着いたとき、10数年前ピサの国際会計史学会でオオ・ソレ・ミオ」を歌った後、日本人の先生達と「赤とんぼ」を合唱したときのことを思い出した。そして一人で「夕やけ小やけの赤とんぼ・・・」を口ずさんでみたら、胸がいっぱいになった。

2日目の29日(火)は、一時から閉会式が開かれ、主催者側を代表して、ヴェルミリオ教授が、イタリア語による30分近いクロージング・スピーチを行った。イタリア人独特の、極めて迫力のある話し方であった。スピーチの中で、私の名前があげられ、日本ではパチョーリの研究が盛んであること、パチョーリの生まれ故郷ボルゴ・サン・セポルクロに私が6回も訪問していること、そし

て私の歌を三大テナーと比較して、話してくれた。感激の限りであった。

最後に15人の招待された報告者の名前が、順番に読み上げられた。そして一人一人が、席から奥の中央テーブルまで歩いて行き、議長から、「イタリア会計史学会」発行の「レオナルド・フィボナッチ」の記念のメダルを、出席者全員の拍手の中で、受け取ることによって、すべての式は盛会のうちに終了した。

[付記：上記の会計史国際会議に出席され、報告の大任を果たされた片岡泰彦先生の記事がイタリア経済・金融雑誌“SUMMA”(137 / Genrrio 1999, PP. 65-66)に掲載されています。パチョーリ『スムマ』の意義、日本での研究、ご自身の研究成果などが写真入りで紹介されました。]

The **IP**ACIOLI **S**OCIETY **U**JAPAN

日本パチョーリ協会 〒112-8585 東京都文京区小日向3-4-14 拓殖大学 商学部 三代川 研究室 TEL.03-3955-8783
The Institute for Management and Accounting / Takushoku Univ. Miyokawa Office